

# ブタはどのようにして現金になりうるのか？

## パプアニューギニア高地辺縁部における生業生態と貨幣経済

How Are Pigs Exchanged for Cash ?

### 小谷真吾

はじめに

①ボサビ

②ボサビにおけるブタ飼育

③生業の変化と貨幣経済の受容

④現金とブタ

⑤ブタ売買の事例

⑥ブタの消費

⑦ブタ飼育の定量的特徴

⑧貨幣経済とブタ売買に関する考察

#### 【論文要旨】

畑を荒らしたブタは、人々の収入源である。人々は故意に畑の中にブタを放ち、そうしてからブタを屠殺し売却することで現金を得る。これは、パプアニューギニア南部高地州に居住するボサビにおける事例である。この事例は、貨幣経済がどのようにシステムの中に取り込まれていくのか、その過程を表しているのではないか。本論文では、ボサビのブタ飼育をはじめとする生業生態を明らかにし、他集団における環境利用システムと比較することによって、彼らのブタ飼育の特徴を考察した。同時に冒頭の事例の分析によって、近年生態人類学の中で無視できないものになりつつも、その過程の分析がほとんど行なわれてこなかった、生業生態システムへの貨幣経済の浸透について考察を行なうことを目的とした。

その結果、ブタの売買が行なわれた／行なわれなかった場合の主観的理由を弁別する基準を分析してみると、ブタが自分の共同体に属していない／いるという基準が設定できた。「畑を荒らした」、あるいは「野生化した」という操作がなされて、ブタは共同体外の存在に分類される。そこには、食物交換に関する呪術的信仰が強力な彼らの社会において、飼いブタがその所有者によって消費されることを忌避する規範が背景に存在する。そうまでしてブタの売買を行なう理由を考えると、他に売買に値する事物がボサビに存在しないことが挙げられる。それは、他に余剰生産物がないことと同時に、貨幣経済の浸透する以前からブタが交換財として使用されてきたことにもよると考えられる。一方で、ブタの交換財としての使用は近年盛んになったと考えられ、それは貨幣経済の浸透、外部からの影響の増大と同期している。貨幣経済の浸透とブタの売買は、ポジティブ・フィードバックの関係を持ってそれぞれの受容を加速していったと考えられるのである。

---

## はじめに

グローバリゼーションの進行に伴って、世界中のあらゆる地域で貨幣経済が浸透しつつある。そして伝統的な環境利用の手段は否応なしに、貨幣経済を通じて否応なしに世界システムに統合されつつある。そのような背景から、非西欧の社会には不変な「本質」となる文化要素が存在するという仮定が、人類学的研究の実践においても倫理においても成り立たなくなっているという本質主義の議論がなされて久しい [Clifford and Marcus 1986]。その議論の前提となっている貨幣経済の浸透過程に対する関心は、変容を記述することに難色を示してきた人類学者にも近年共有されているであろう。

しかし貨幣経済がどのようにして、それまで自給自足的な環境利用システムを維持してきた集団に浸透していくのか、その詳細な過程について記された民族誌は意外に少ない。経済人類学、あるいはポストコロニアルの分析において、人々が全てを奪われてしまった上で、貨幣経済に組み込まれ搾取されていく過程は以前からよく論じられてきているのだが、集団が自律的にその資源や労働を貨幣経済に組み込んでいく過程はあまり関心を持たれて来なかった。例えば、筆者と同じパプアニューギニアをフィールドとして、資本主義と貨幣経済の本質を議論し続けているゴドリエは、バルヤの社会を資本主義社会と比較されるべき伝統社会として描く。もちろんそのような対比によっても貨幣経済の受容について一定の考察はできると考えられるが、もし彼がバルヤ社会の経時的変化を分析するならばより生産的な議論を展開できるはずなのだが [ゴドリエ 2000]。

もちろん植民地支配など外部からの権力によって貨幣経済化が導入される過程は否定しようもないが、ここまでグローバリゼーションが進行するという事は、やはり人々の自律的な受容が少なからず存在するに違いない。そこでは、何が現金と交換可能な物であるか、あるいは何が貨幣経済とは相容れないものなのかを、人々は判断しながら貨幣経済に参加しているはずである。そしてそのような判断の基準になっているのは、イデオロギーのような形而上的思考ではなく、日々の人間関係や生産物の出来具合など日常の実践であろう。

畑を荒らしたブタは、人々の収入源である。人々は故意に畑の中にブタを放ち、そうしてからブタを屠殺し、肉を売却することで現金を得る。これは、パプアニューギニア、南部高地州に居住するボサビの村落の一つ、シバラマ村における事例である。この事例は、貨幣経済がどのように社会システムあるいは生態システムの中に取り込まれているのか、その過程を如実に表しているものとして興味深かった。本論文では、ボサビのブタ飼育をはじめとする生業生態を明らかにし、他集団における環境利用システムと比較することによって、ブタが生態学的にも社会的にも重要な意味を持っているパプアニューギニアの中で、彼らのブタ飼育がどのような特徴を持っているのかを考察していく。同時に、冒頭のような事例の分析によって、生態人類学の中で、近年その影響が無視できないものになりつつも、その過程の分析がほとんど行なわれてこなかった、生業生態システムへの貨幣経済の浸透について考察を行なうことを目的とした。

# ①……………ボサビ

ボサビは、パプアニューギニア南部高地州の西南部にそびえるボサビ山の北斜面に居住する、人

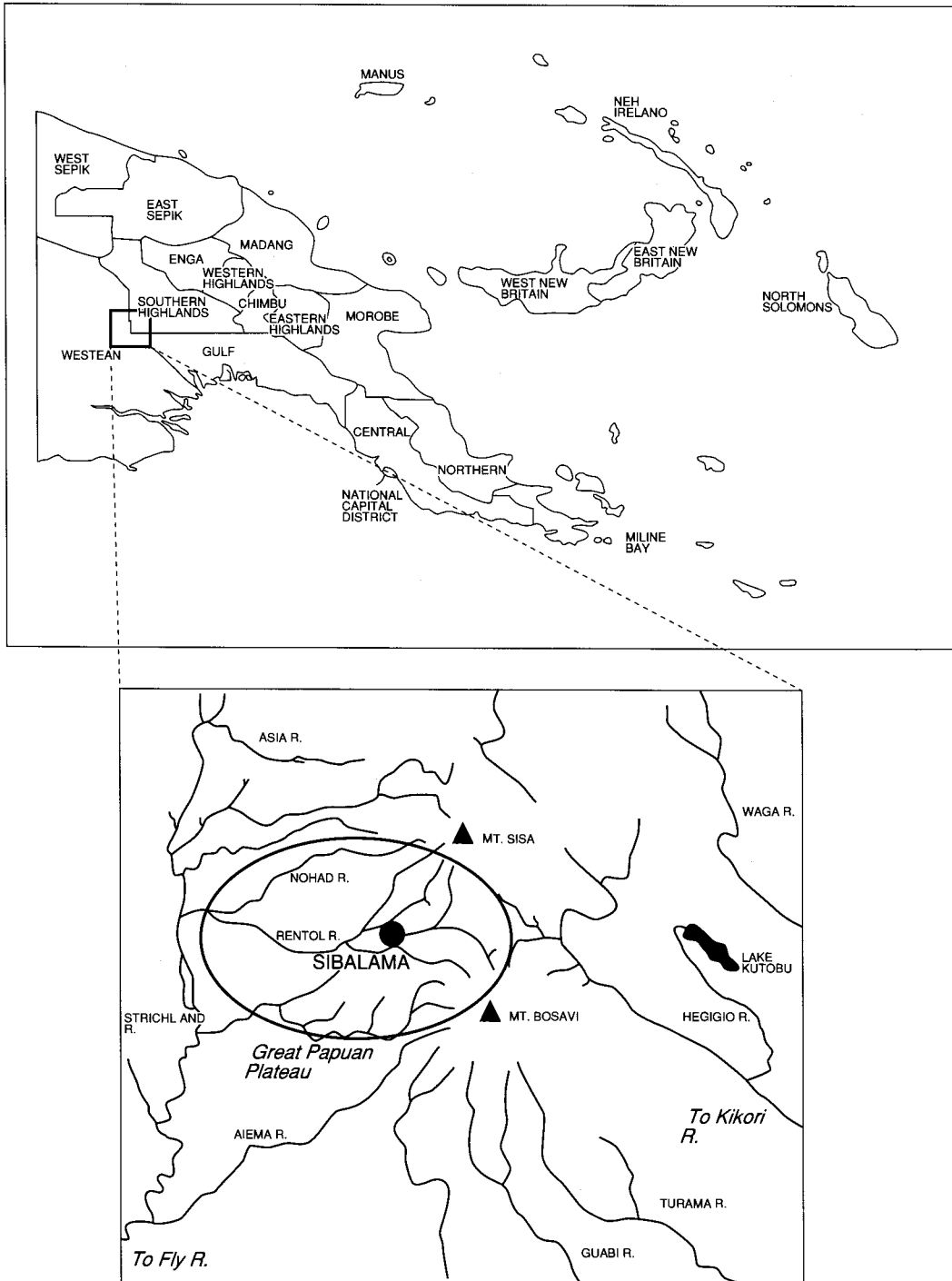


図1 パプアニューギニア全図及び大パプア台地

口3,000人程度の言語集団である。ボサビ山は、南部高地州から西部州にかけて広がる大パプア台地 (Great Papuan Plateau) の東部にある孤立した山塊であり、標高は2300m、ボサビはその山腹の標高400mから700mの間に居住する。ボサビ居住域の年間平均気温は最低20度、最高28度、年間降水量は4,000mmを超え、パプアニューギニアの中でも最も湿潤な地域の一つである。気候による季節変化は鮮明ではなく、植生的は典型的な熱帯雨林気候であると言える [McAlpine et. al. 1975]。パプアニューギニアの全図と、本研究の対象地域である大パプア台地の概要は、図1に示した通りである。筆者は、ボサビの村落の一つシバラマ村において1998年11月から1999年11月までの約1年間、人類学的調査を行なった。本論文で論じる事例は全てその調査に基づいたものである。

ボサビは、行政的には南部高地州タリ行政区オロゴ地区に属し、12の村落に分かれている。シバラマはボサビ居住域の西辺に当たり、標高は500m程度、ボサビ居住域の中では最も温暖湿潤な地点に存在する。村の人口は、1999年11月の時点で150人、その構成は男性79人、女性71人である。シバラマの人々の所有する土地は、東西に2.5km、南北に14kmの細長い長方形の形に広がり、面積が35km<sup>2</sup>、人口密度が4.3人/km<sup>2</sup>と計算される。

ボサビが伝統的に行なってきた生業は、主にバナナ栽培を中心とした移動農耕、サゴデンプン精製、狩猟採集である。この内、バナナ栽培を中心とした移動農耕は、パプアニューギニアの中でも大パプア台地のみで行なわれているユニークなものであり、その概要は次の通りである。最初に一次林あるいは10年以上の休耕期間を経た二次林において、下ばえを刈り取り、そこに古い畑から採取してきたバナナの苗を4m<sup>2</sup>から5m<sup>2</sup>ごとに植え付ける。そうしたうえで、苗の上に樹木を切り倒していく。当然、ある程度の苗は死滅するが、大部分の苗は切り倒された樹木の間において正常に成長し、約1年後から収穫が始まる。バナナの収穫期間は、畑の手入れ次第で2年から5年と幅があるが、その収穫期間中にバナナの樹木の間にはパングヌス及びパンノキの苗が植えられる。バナナの収穫期間が終わると、パングヌス及びパンノキの果実の収穫が始まるが、この時期になると畑の手入れはされなくなる。パングヌス及びパンノキの収穫期間中に、畑は徐々に二次林の様相を呈し、畑が造成されてから約10年後、パングヌス及びパンノキの収穫も停止され、畑は二次林に戻る。

このように苗の上に樹木を切り倒すという方法は、多雨による土壌の流出、倒木の腐敗の速やかな進行などの、この地域の熱帯雨林気候下の環境要因を考慮すれば、土地の収奪のより少ない持続的な農耕である。一方このような農法は、その単位面積当たりの生産量は低く、人々が畑を造成する際、一度に数ヘクタールといった大規模な造成を行なうのはそのためであると考えられる。

このような大規模な造成は、この地域に居住する人々の伝統的な共同体組織である、ロングハウス共同体という社会組織に支えられている。ロングハウス共同体は、60人から70人が居住できるロングハウスに共住している、血縁関係にある人々によって構成される共同体である。伝統的には、ロングハウスは一つの丘の頂上付近に建設され、その周りの斜面が畑に造成されるが、これらはこの共同体の協業によってなされる。丘の全ての部分においてバナナの収穫が終わる、10年から15年の後、共同体は、その所有する別の土地にロングハウスから畑まで全てを移動する。

彼らの生業の中で、もう一つ大きな位置を占めているサゴデンプン精製は、南太平洋地域に広く

分布するMetroxylon属の植物、サゴヤシの幹からデンプンを精製するという生業である。まず男性によって、サゴヤシの木が切り倒され、皮が剥がれた後に、その芯が独特の道具によって破碎される。次に、女性によって、破碎されたチップが水に晒されることで、デンプンが精製されてくる。デンプンは、沈殿させることによって水が取り除かれ、片栗粉状の塊になると出来上がりである。このデンプンは、そのまま焼いたり蒸したりして消費されるのに加え、泥の中に入れておくことで約1年は保存することができる、彼らの唯一の保存食品である。

狩猟採集は、特に動物性タンパク質を獲得できる点で、上記二種類の生業を補完しているといえる。陸上動物の捕獲は、知識さえ保持していれば確実に捕獲できるワナを使用することが多い。ワナは、括りワナや落とし穴など多彩なワナが使用されており、ロングハウスの周りの森林に数多く仕掛けられる。そこで最も多く捕獲されるのは、フクロネズミである。またサゴヤシに巣食うカミキリムシの幼虫も、採集される動物の中で重要なものである。一方、魚介類の採集も、魚毒漁とザリガニ採集を中心に盛んに行なわれている。

以上のようなボサビの伝統的な生業生態については、別の拙稿に詳細な分析を行ったので参照されたい [小谷 2001, Odani 2002]。

## ②……………ボサビにおけるブタ飼育

本論文がブタの売買を中心に貨幣経済の受容を考察するという目的を挙げているにもかかわらず、上記の伝統的な生業の記述にブタ飼育を含めなかったのは、ブタ飼育が伝統的に彼らの生業で重要な位置を占めていたと言い切ることが困難だからである。

パプアニューギニアにおけるブタ飼育は、パプアニューギニア高地地域で生業生態システム、さらには社会システムの中心として記述されてきた。高地地域では、サツマイモ栽培の集約化と人口増加が相互に作用することによって、森林がほとんど見られなくなるような、環境を大規模に改変する環境利用システムが構築されていった。その過程で、持続的に利用可能な唯一の動物性タンパク質の供給源として、また人口増加に伴う集団間の緊張を緩和する交換財として、ブタが非常に大きな役割を担ってきたのである [Modjeska 1982]。

一方で、ボサビを含む大パプア台地の集団、あるいはより低地の集団においては、高地のような大規模な環境改変を伴うシステムは構築されてこなかった。ボサビでも狩猟採集によって動物を獲得してきたように、必ずしも生業生態の上でブタ飼育が重要な役割を果たす必要はないといえる。同じ大パプア台地の集団、クボではキリスト教原理主義の受容によってブタ飼育を放棄してしまった事例が報告されているし [Suda 1997]、より低地のギデラではそもそもブタ飼育をしていないことが報告されている [Ohtsuka 1983]。これらの事例は、高地以外の集団において、少なくとも生態学的にはブタに完全に依存する必要のないことを示している。また社会的にも、高地で広く報告されているように婚資（結婚の時に支払われる財）としてブタを用いることは、少なくともボサビにおいては近年開始されたものであり伝統的には行なわれてこなかったと考えられる。

しかしそのような「伝統」に基づいたシステムの分類は、「現在」を記述するのに適切であるとは言いがたい。後述するように、ボサビの環境利用システムは外部との接触により日々変容し続け

ており、貨幣経済の受容や生業生態の変化などを包含するその変容を分析することこそが本論文の目的の一つである。その視点から見れば、ボサビのブタ飼育が生業生態の中で占める重要性は現在増大しており、またその増大は彼らの環境利用システムの変容を示すメルクマールの一つである。伝統的に行なわれてこなかったと考えられる婚資としてのブタ使用が、現在盛んに行なわれていることは、そのことを定性的に示す一つの例である。

さて以下、ボサビにおけるブタ飼育の実践を紹介していきたい。彼らのブタ飼育は、高地地域における集約的な飼育に比べれば、現在でも比較的粗放なものである。基本的にほとんどのブタは、村外で（サツマイモ導入以前には村内にも出入りしていた）生きている。そのような状態で、母ブタが子ブタを出産し、母ブタの所有者がそれを発見すると、その子ブタは母ブタから引き離され、所有者の家に連れてこられる。子ブタの頭数に応じて、子ブタは、他の世帯に分配されたり間引きされたりし、所有者の手元には数頭が残される。それから6～12カ月の間、子ブタは足に縄を付けられ、所有者と行動を共にし、調理されたあるいは噛み砕いてもらったエサを食べて成長することによって、人づけされる。その耳は所有者の好みによって、様々な形に切られ、誰々の飼育ブタであることが分かるようにされる。6～12カ月後、ブタは村外に放され、基本的には自らエサを探して生きていくことになる。もちろん所有者は定期的にブタを見回り、名前を呼んでエサを与えることで管理を行い、またブタも幼年期を過ぎた所有者の所有地付近をうろついている。

しかしこのような粗放な飼育では、ブタの野生化が問題となりうる。まず所有者が、母ブタの出産を早期に発見できずに数ヶ月経過してしまうと、子ブタに対する人づけは困難になり、子ブタは野ブタとして認識されるに至る。母ブタは人づけされているのであるから、早晚この子ブタは発見され狩られるのであるが、それでも見落とされる子ブタは多いらしく、人間の居住域の辺縁には野ブタが多く徘徊している。また人づけの効果も5、6年経過してしまうと最早効力を失ってしまうらしく、所有者の呼び掛けにも応じず、時には人間に対して攻撃を加えるようになる。定量的に調べたわけではないが、このように長期間放置され野生化してしまうブタはオスが多いようである。メスは、出産のチェックのため小まめに管理をされるのに対して、オスは特に所有者の関心を引かないためであると考えられる。

このように粗放な飼育形態にも関わらず、ブタの所有権は共同体成員によって厳格に守られている。例えば、一人のシバラマ村民が婚資としてのブタを自分の所有地で捕獲し、妻の親族に提供したことがあった。妻の親族は直ちにそのブタを消費してしまったが、その後、隣村の住民が彼に苦情を申し立ててきた。彼の捕獲したブタはその隣村の住民のものであり、彼のブタはまだ生きてその付近を徘徊している、というものである。彼、シバラマ村民、そして隣村住民が共同して再確認したところ、確かに彼のブタはまだ生きており、彼が隣村住民所有のブタを自分のものと誤認して捕獲したことが明らかになった。その結果、隣村の住民から500キナ（1キナ=約30円、ブタの大きさから推定される相場200キナ程度）が請求され、その支払いのため彼は出稼ぎに行くことを余儀なくされた。その後彼は帰村し、隣村の住民にきちんと500キナ支払い、この問題は解決した。

ブタの所有者は、飼育という面から見れば、成人後（初経後）の女性個人である。ブタに対する世話と管理は、一人一人の女性が責任を持つ。しかし社会的な所有権、つまりブタの使用（交換、

消費、販売)に当たっての可処分権は、飼育している成人女性を中心に、彼らの父系的な親族構造の中でグラディエーションを持ちながら広がっている。女性が結婚していれば夫が、未婚なら父親が、女性以上の可処分権を持ち、その次には兄弟、そして従兄弟及び叔父、甥、さらにはリネージ成員の男性へ可処分権は広がっている。可処分権において劣位にある者は、優位にある者の同意を経て、あるいは権利を提供されてのみ、ブタを使用することができる。

### ③……………生業の変化と貨幣経済の受容

ここでブタ飼育の重要度の増大、そして貨幣経済の受容を含む、ボサビの社会全体に関する近年の変容を描いておきたい。まず長年に渡る行政の指導、及びキリスト教伝道団の布教の結果、ロングハウス共同体が数個集合し、定住的な村落を形成するようになった。例えば筆者が主な調査対象としたシバラマ村もそのような定住的村落であり、もともとは3つあったロングハウス共同体が集合して出来たものである。ロングハウスは現在でも村落の中に存在していることもあるが、人々は世帯ごとの住居に居住し、世帯ごとで生業を成り立たせることを指向している。つまりこの定住化の結果、彼らの生業はより集約的なものを指向しつつあると考えられる。

行政とキリスト教伝道団は、定住化と共に、サツマイモ栽培も持ち込んだ。サツマイモ栽培は、高地地域で広く行なわれており、マウンド技術を使った生産性の高いものである。先行研究によれば [Dwyer 1990]、大パプア台地の北部では比較的早くからサツマイモ栽培が行なわれていたようであるが、行政によるパトロールレポート [National Archives of Papua New Guinea 1934-1975]、及びE. Scheffelinの報告 [Schieffelin 1977]によれば、このボサビ以南の領域では、少なくとも1950年代までサツマイモは栽培されていなかったと考えられる。このサツマイモ栽培の導入により、人々はロングハウスあるいは村の周囲を柵で囲うことを開始し、それまで家の周りを自由にうろつくことのできたブタは、一定の年齢を超えると村外で飼われることとなった。

サツマイモ畑は、村落外の、あるいは村落内の世帯が所有する家の周りに作られ、その造成から収穫まで全て世帯の手によってなされる。伝統的な移動農耕の畑と比較すると、その生業の形態は我々の感覚で言う「畑」にかなり近いものがある。つまり畑が作られる際は、雑草が刈り取られ火が入られる。火入れがされた後、耕うんがなされ、マウンドが作られる。除草はこまめに行われ、約3ヶ月後から収穫が行われる。1回の収穫で、1つのマウンドに植えられたサツマイモは全て収穫される。1回で放棄される畑も存在するが、多くの場合、耕うんを行った後、新たにマウンドが作り直され連作が行われる。この連作の回数は、その土地の肥沃さに依存していると考えられるが、通常3回から4回である。そして収穫が限界を迎えた畑は、放棄されるのであるが、その跡地は、土壌の疲弊と侵食が進み、雑草も生えない状態になる。

居住形態、あるいはサツマイモを始めとする新たな作物の導入、道具類の刷新など、彼らの生業をとりまく状況は激変しているが、それでも生業システムの大きな枠組みは変わっていない。つまり商品作物は導入されておらず、彼らの生業が世界経済システムに直接組み込まれてはいないということである。情報量の増大した現在、彼らはもちろん商品作物の価値を理解しており、できれば自分の地域に導入したいと考えているが、セサナ機あるいは徒歩しか輸送手段のない以上、彼らが

農業市場に参加するのは無理な話である。作物の種類と比率、栽培方法、消費手段などが変化したとはいえ、彼らは依然、バナナ、サゴデンプン、そしてサツマイモを生産し、主食としている。またブタ、あるいは狩猟採集された獣肉、魚介類、昆虫類が、主要なタンパク質源である。米や缶詰などの購入食品は、すでに導入されて長く、彼らの嗜好を刺激し続けており、あるいは生業形態の枠組みを変える一因になるかもしれないが、今の時点ではそれほど消費されておらず、1世帯で1カ月に1度消費する程度である。

しかし貨幣経済は確実に浸透している。購入食品は、塩を除いてそれほど普及していないとはいえ、彼らにとって現金はすでに不可欠なものである。生産財としての斧、ブッシュナイフ、金具、懐中電灯等は、彼らの生業になくなくてはならないものであり、鍋、皿、衣服、石鹸、ランプ等も、日常生活において広く使用されている。腕時計やラジオは、個人あるいは世帯のステータスを誇示するために争って求められ、聖書やギターがキリスト教の信仰を成り立たせている。これらの物品は、出稼ぎの現場で、あるいは直接都市に向いて購入される他、飛行場の周辺に外部からの移住者が設立した雑貨店において購入される。このような物品の購入に、1世帯で1カ月に約5キナは使用する。また出稼ぎや物品購入、病気治療の際の移動における飛行機代は100キナ以上であり、それらが数年に一度のこととしても世帯にとって莫大な出費である。

そのような現金はほとんど全て、1980年代に西部州において始まった商業的木材伐採に出稼ぎ労働者として雇用されることで獲得されている。西部州における商業的木材伐採は、主に日本向けの合板材を生産するために、ボザビ山の南斜面から海岸部までの広大な地域を、マレーシア企業が西部州の行政の協力を得て開発したものである。ボザビ周辺では、開発以前の土地買収の頃から開発の話はよく知られており、開発が始まると土地を売った地権集団の紹介で、最初の段階から出稼ぎ労働者として雇われることになった。この出稼ぎは、現在でもボザビの男性が従事しており、一つの村落から常に4、5人が半年程度の労働に出掛けている。

出稼ぎに出掛けるのは、ほとんどが15歳から30歳までの未婚あるいは結婚してまもない男性である。彼らは、1,000キナから10,000キナという彼らにとって莫大な金額を、嫁側の親族から婚資として要求されるため、他に現金獲得の手段がない以上、否応なくこの出稼ぎに従事せざるを得ない。逆に言えば、このような出稼ぎという現金獲得の手段が出来たことで、婚資を現金で支払う慣習が成立したのだと考えられる。それまでは子安貝や真珠母貝が婚資として流通していたのだが、世界経済システムに直結した交換価値を持つ現金が獲得可能になった以上、貝を婚資として使用することに意味を見出すのは困難であろう。こうして嫁側に婚資として支払われた現金が、嫁側の親族の間で分配され、ボザビの領域内で貨幣として流通しているのである。

#### ④……………現金とブタ

ではこのように流入してくる現金は、出稼ぎに行った者と、婚資を受け取った人々のみが使用し、外部へ還流していくのであろうか。そうではあるまい。階級あるいは階層の分化のまだ認められないこの地域において、物品その他に対する世帯ごとの需要は一様であり、流入してくる貨幣を再分配するようなシステムの存在が予想される。そもそも大パプア台地に居住する集団では、呪術に対



する恐れに基づいた社会の平準化システムが特徴的であり [須田 2002], 現金に関しても所有の不平等は平準化の対象になるはずである。

ボサビの間で、その再分配を媒介しているのが、ブタの売買だと考えられるのである。伝統的にボサビの婚資は、子安貝や真珠母貝、及びイヌの歯であった。しかし現在は現金とブタである。つまり婚資に供する分、ブタの生産は増加しているはずである。ブタは以前からボサビにおいて生産されていたと考えられるが、この婚資に供するために生産される分は余剰生産物なのである。貝や歯、現金は交換価値のみを持つ「貨幣」であるのに対して、ブタは交換価値を持つばかりではなく、動物性タンパク質を供給できるという使用価値も持つ。またブタの生産の増加は、サツマイモ栽培、定住化、そして貨幣経済とセットとしてボサビに受容されてきたので、人々は現金と他の生産物とを関連付けるよりはるかにブタと関連付けるほうが容易であっただろう。

しかし一方で、生業生態の生産物であるブタと近代的貨幣としての現金の間には、葛藤が存在することも予想される。つまりより閉鎖的な生産財と社会システムに結びつきが強いブタと、世界システムに直結している現金とを交換するためには、価値の標準化が必要である。この価値の標準化のために、何らかの儀礼あるいは手続きの工夫が行なわれていることが予想される。

人々が故意に畑の中にブタを放ち、そうしてからブタを屠殺し、肉を売却することで現金を得る。本論文でとりあげる以下の事例は、まさにこの価値の標準化のための手続きと考えられる。そしてブタが売り出された背景、またブタ売買の頻度と、取引されるブタと現金の量を見ることによって、彼らの貨幣経済への移行状況を明らかにすることができるだろう。では以下、その事例の詳細を記述していきたい。

## ⑤……………ブタ売買の事例

まずその具体例を見てみよう。ある日、筆者が居候していた家の男性（いわゆる家主ではなく、筆者と同じく居候状態にある、家主の従兄弟にあたる男性）が、早朝からサツマイモ畑でイモを収穫していた。調理するのかと思っていたが、彼はそのまま村の周りを囲っている柵の外に出て、彼の所有する（厳密には彼の妻が飼育している）、ブタ（推定5才）の名前を呼び始めた。ブタは彼のもとに現われたが、彼はサツマイモを使い、ブタを柵の中に誘導する。何の目的かと思っていたが、次の瞬間、彼は「ブタがサツマイモ畑を荒らしているぞ。皆、見にきてくれ。」と叫び始めた。村人たちは即座にその場に集まり、ブタを抱えて柵の外に排除した。排除し終わった後、彼は皆に向かって、「皆の畑が荒らされてしまった。あのブタはもう私の言うことを聞かなくなった。殺さなくてはいけない。」と演説した。その場で若者を中心にブタ狩り隊が構成され、エサのサツマイモと弓矢を持って、そのブタを狩りに出掛けた。数時間後、ブタは死体となって、若者たちの担ぐ棒にくぐられ村に帰ってきた。

1才をこえたブタは、木の柵の外で放し飼いにされている。柵は、ブタが容易に村の中に作られているサツマイモ畑に侵入できないように巧妙に作られているが、それでもブタは柵の破れを見つけて、1カ月に1度くらいの頻度で畑に侵入してくる。ブタが放し飼いにされている以上、時々のサツマイモ畑への侵入は当然のことであると言える。しかし人々はブタのそのような行為に対して

非常に敏感で、就寝中でも集会中でも、ブタの侵入を察知すると一斉にブタの周りに集まり、村外に排除する。たいていの場合、その被害はサツマイモ数株くらいといったような些末なものである。侵入したブタの所有者は、5日間の村内労働の無償奉仕か、罰金10キナ（2キナ×5）を強いられるが、所有者はこれを甘んじて受け、ブタを処分するようなことはない。ところがこの事例においては、罰則は適用されず、所有者がブタを屠殺するという行為に出た。それ以前の所有者の一見、不可解な行動も含めて、明らかに通常のブタ侵入とは異なっていた。

さて村に持ち帰られたブタは、家の縁側で解体され、サゴデンブン、食用シダと共にムームー（焼石とバショウの葉を使った蒸し焼き）にされた。数時間後、ブタは蒸し上がり、「ブタ売りだ。ブタ売りだ。」との掛け声のもとに、この時を待っていた村民たちが集まってきた。彼の言い値では、肩40キナ、モモ60キナ、バラ30キナ、ロース15キナ、頭10キナ、レバー10キナ、胃4キナ、心臓3キナ、脂肪部20キナ、計192キナということであった。村人たちは、2キナ紙幣、1キナコイン、あるいは10トヤコイン（100トヤ＝1キナ）を彼に支払いながら、2kg程度の塊、あるいは500g程度の小片を持ち帰っていく。やがて100キナ程度売れた時点で、シバラマ村住民のブタに対する欲求は満たされた見え、それ以上は売れなくなった。残りの肉はいろりの上にある籠の中で保存され、次の日、彼とその近縁の若者が、他の村に売りに出掛けた。そうして全ての肉を現金に変換し終わって、彼らは村に帰ってきた。彼に、結局いくら儲けたのか聞いたところ、「レバーや心臓などおいしいところは、自分たち家族で食ってしまった。またいくぶん近縁者にもタダで分けた。そして売れない時は値引きもした。だから全部で、150キナくらいかな。」ということであった。

筆者が、彼にブタを殺し、肉を売却した理由をたずねると、「ブタが畑を荒らしたからだ。」とのことであった。いわゆる建前である。筆者が、彼がサツマイモを使ってブタを畑まで誘導していたことを指摘すると、彼はいわゆる本音を言ってくれた。本音は、「私は、自分の家を建てたいのだ。娘も1人いるし、現在、妻は妊娠している。これを機に、私は独立したいのだ。しかし家を建てるのは、鍵や金具を購入するのに現金が要る。だから私は、ブタを畑に入れて、ブタを売ったのだ。」ということであった。数日後、彼は飛行場のある村に出向き、釘や蝶番などを購入して帰ってきた。その後、彼の家は無事に完成し、彼のブタは、「畑を荒らした」ことで現金に、そして世帯所有の家に变化したのである。

## ⑥……………ブタの消費

さてこのような「畑を荒らした」ブタが売買され、人々の現金に対する欲求を満たしていることには、どのような意味があるのだろうか。このことを考えるために、表1に、1998年12月から1999年10月までの11カ月間に、シバラマ村民が所有するブタの内、屠殺され、売買あるいは無償で消費されたブタの、屠殺の日付、屠殺理由（分配者が主張する理由）、肉の用途（観察される「本音」の屠殺目的）、売買が行われた場合はその金額、飼育者（成人女性）と分配者（屠殺し売買等を取り仕切った者）の関係、及びブタの推定年齢をまとめてみた。この表は、主に間引きとして世帯内で消費されたであろう子ブタ、あるいは隠れて消費されたブタは含んでおらず、彼らのブタ

表1 ブタ消費の事例

| 日付     | 屠殺理由 | 肉の用途 | 売却益(キナ) | 肉の分配者の飼育者に対する関係 | ブタの推定年齢(年) |
|--------|------|------|---------|-----------------|------------|
| 12月7日  | 畑荒らし | 婚資   | 150     | 夫               | 3          |
| 12月8日  | 畑荒らし | 売却   | 150     | 息子              | 4          |
| 12月19日 | 野性化  | 婚資   | 200     | 夫の従兄弟           | 5          |
| 12月23日 | 野性化  | 婚資   | 200     | 夫               | 5          |
| 12月30日 | 他村祭  | 売却   | 300     | 夫               | 4          |
| 12月30日 | 他村祭  | 売却   | 200     | 本人              | 3          |
| 12月31日 | 他村祭  | 売却   | 300     | 夫               | 4          |
| 1月10日  | 畑荒らし | 売却   | 100     | 夫               | 3          |
| 1月14日  | 野ブタ  | 売却   | 250     |                 | 8          |
| 1月15日  | 他村祭  | 売却   | 200     | 夫               | 3          |
| 1月15日  | 他村祭  | 売却   | 200     | 夫               | 3          |
| 1月20日  | 畑荒らし | 売却   | 50      | 夫               | 1          |
| 1月24日  | 病死   | 売却   | 50      | 夫               | 1          |
| 1月31日  | 野性化  | 婚資   | 100     | 夫の従兄弟           | 1          |
| 2月9日   | 畑荒らし | 売却   | 200     | 本人の従兄弟          | 6          |
| 2月17日  | 野性化  | 婚資   | 100     | 息子              | 1          |
| 2月22日  | 野性化  | 無償奉仕 | 0       | 夫の兄弟            | 6          |
| 3月1日   | 畑荒らし | 婚資   | 150     | 兄弟              | 3          |
| 3月14日  | 野ブタ  | 婚資   | 250     |                 | 5          |
| 3月21日  | 野性化  | 婚資   | 150     | 兄弟              | 3          |
| 5月12日  | 畑荒らし | 売却   | 50      | 夫               | 1          |
| 5月13日  | 自村祭  | 無償奉仕 | 0       | 夫               | 2          |
| 5月13日  | 自村祭  | 売却   | 200     | 本人              | 4          |
| 5月18日  | 自村祭  | 売却   | 200     | 本人              | 5          |
| 5月21日  | 自村祭  | 無償奉仕 | 0       | 夫               | 3          |
| 5月21日  | 自村祭  | 無償奉仕 | 0       | 夫               | 3          |
| 5月21日  | 野ブタ  | 無償奉仕 | 0       | 息子              | 3          |
| 6月31日  | 葬式   | 無償奉仕 | 0       | 夫               | 6          |
| 7月3日   | 野ブタ  | 売却   | 200     |                 | 5          |
| 7月8日   | 婚資消費 | 無償奉仕 | 0       | 夫               | 3          |
| 7月8日   | 婚資消費 | 無償奉仕 | 0       | 夫               | 7          |
| 7月8日   | 婚資消費 | 無償奉仕 | 0       | 兄弟              | 3          |
| 7月8日   | 婚資消費 | 無償奉仕 | 0       | 兄弟の義兄弟          | 4          |
| 7月17日  | 婚資消費 | 無償奉仕 | 0       | 兄弟              | 3          |
| 7月17日  | 葬式   | 無償奉仕 | 0       | 本人              | 4          |
| 7月17日  | 葬式   | 無償奉仕 | 0       | 本人              | 5          |
| 7月17日  | 葬式   | 無償奉仕 | 0       | 夫               | 4          |
| 8月10日  | 野ブタ  | 売却   | 200     |                 | 4          |
| 8月21日  | 他村祭  | 売却   | 300     | 夫               | 5          |
| 10月13日 | 畑荒らし | 売却   | 150     | 息子              | 4          |
| 10月19日 | 野ブタ  | 売却   | 100     | 父               | 3          |

消費を完全に反映したものであるとは言えないが、少なくともブタの売買等、社会的行為に関係したブタ屠殺に関しては全てを記録したものである。

この表の「屠殺理由」の欄で、「畑荒らし」と記されているのは、事例に挙げた通りのブタが「畑を荒らした」ため屠殺された例である。「野生化」と記されているのは、「畑を荒らす」ことはしなかったが、他に野生化の兆候が見られたと主張されること<sup>(2)</sup>で、屠殺された例である。「野ブタ」は、狩猟によって得られた野ブタが、村内で分配された例であるが、狩猟後、その出自が飼いブタであったことが判明し、元来の所有者が販売権を得た例も含んでいる。「自村祭」「他村祭」と記されているのは、この調査期間中に行われていた、キリスト教の洗礼の儀式を中心にした一種の祭りにおいて屠殺（他村の場合は、自村で屠殺された後他村に運搬）された例である。この洗礼を中心とした祭は、現在ではほとんど行なわれることなくなった、ギサロと呼ばれる儀礼に代わるものとして、人々の娯集、大規模な交換が行なわれる場であり、筆者の滞在した1999年において、特に多く開催された。「婚資消費」は、結婚時に花婿側から花嫁側に婚資として支払われたブタが、その場で屠殺され村民にふるまわれたものである。「葬式」は、我々の感覚での葬式とはかなり異なるものであるが、死亡したシバラマ村民の家を、他村の親族が訪問してきた際に、その他村の親族を歓待するために屠殺されたものである。「病死」が一例含まれているが、ボサビの人々は原則的に病死したブタは食べない。しかし子ブタを間引きした際食べる場合、「病死」として説明される。間引きは村内で飼われている約1歳未満の子ブタに対して行われるが、この場合はその「建前」に従って、村外で飼われているブタが売買されたと考えられる。

筆者が観察し、判断した「肉の用途」の欄で、「売却」とあるのは、その通り現金を得るために屠殺され売買されたと判断される事例である。また「婚資」とあるのは、同じように現金を得るために売買された事例であるが、その現金の用途が婚資に限定されると判断された事例である。「無償奉仕」は、「屠殺理由」の通りに、祭りや葬式、結婚式の際に無償でブタが屠殺された事例である。「野生化」で一件、「無償奉仕」の例があるが、この事例の場合、飼っていたブタが村民に対して襲い掛かった（けが人も出た）ので、その賠償の意味も込めて無償奉仕されていた。売却益は、聞き取りに基づいて計算したものであり、おおよその数字である。

まとめてみると、売買が行われた（売却益のあった）場合は、圧倒的に「畑荒らし」及び「野生化」という主観的理由が多い。また「他村祭」という理由で売買された場合も多い。一方で、「婚資消費」、「葬式」、「自村祭」という理由では、ほとんど売買されていない。売買を伴わないということでは、この「婚資消費」、「葬式」、「自村祭」が、いわゆる伝統的なブタの消費形態のように見える。しかし婚資としてブタが使用されるようになったのは近年のことであり、「祭」も伝統的なものではなくキリスト教の布教を目的として行なわれていることを考えれば、売買を伴わないことが彼らのブタ消費の「本質」を示すとは言い難い。

そこで売買の行なわれた／行なわれなかった場合の屠殺理由を弁別する基準を考えると、ブタ（の使用）が自分の共同体に属していない／いるという基準が設定できる。つまり前述の事例で挙げたように、ブタが本当に野生化したり畑を荒らしたりしたのかは疑わしい場合が多いが、そのように主張されることで言説上の操作がなされ、ブタが共同体に属していないものとして人々に分類される。あるいは他の村で行なわれる儀礼では、ブタは他の共同体成員によって消費されること

により、やはりそのブタは共同体外に所有権が移ったものとして理解される。

一方で、婚資として消費された場合は、共同体の所有物として消費され、自分たちの村で行なわれる儀礼に際しては、主に共同体自らがブタを消費する。このような基準を当てはめていくと、ブタを売買していいのかわからないのかを、そのブタが共同体に属しているかわからないから人々が判断していることを理解できる。「自村祭」で多少、売買が行われた事例があるのは、キリスト教の儀礼に際して自分たちの共同体がどれほど主体性を持って参加しているかに、認識の差異があるためであると考えられる。

## ⑦……………ブタ飼育の定量的特徴

表 2 生産物の栄養素摂取に対する寄与

エネルギー (2437 kcal)\*

| 順位 | 食品名    | 学名                  | 摂取量(kcal) | %    |
|----|--------|---------------------|-----------|------|
| 1  | バナナ    | Musa cultivar       | 779.8     | 32.0 |
| 2  | サゴ     | Metroxylon spp.     | 647.0     | 26.5 |
| 3  | パンダヌス  | Pandanus spp.       | 352.4     | 14.5 |
| 4  | サツマイモ  | Ipomoea batatas     | 199.4     | 8.2  |
| 5  | サトウキビ  | Saccharum spp.      | 85.2      | 3.5  |
| 6  | ブタ     | Sus scrofa          | 66.7      | 2.7  |
| 7  | ヤムイモ   | Dioscorea spp.      | 50.0      | 2.1  |
| 8  | タロイモ   | Colocasia esculenta | 49.5      | 2.0  |
| 9  | フクロネズミ | Echumipera spp.     | 38.0      | 1.6  |
| 10 | パンノキ   | Artocarpus altilis  | 25.5      | 1.0  |

タンパク質 (50.2 g)

| 順位 | 種名     | 学名              | 摂取量 (g) | %    |
|----|--------|-----------------|---------|------|
| 1  | バナナ    | Musa cultivar   | 10.20   | 20.3 |
| 2  | フクロネズミ | Echumipera spp. | 5.55    | 11.0 |
| 3  | パンダヌス  | Pandanus spp.   | 5.53    | 11.0 |
| 4  | ザリガニ   | Cherax spp.     | 4.68    | 9.3  |
| 5  | ブタ     | Sus scrofa      | 3.70    | 7.4  |
| 6  | サツマイモ  | Ipomoea batatas | 3.14    | 6.2  |
| 7  | ハヤトウリ  | Sechium edule   | 3.10    | 6.2  |
| 8  | ヘビ類**  |                 | 3.01    | 6.0  |
| 9  | サカナ類** |                 | 1.98    | 3.9  |
| 10 | ヤムイモ   | Dioscorea spp.  | 1.26    | 2.5  |

脂肪 (23.1 g)

| 順位 | 種名       | 学名                  | 摂取量 (g) | %    |
|----|----------|---------------------|---------|------|
| 1  | パンダヌス    | Pandanus spp.       | 10.10   | 43.8 |
| 2  | ブタ       | Sus scrofa          | 5.04    | 21.9 |
| 3  | フクロネズミ   | Echumipera spp.     | 1.76    | 7.6  |
| 4  | コンチュウ類** | Cerambycidae family | 1.08    | 4.7  |
| 5  | バナナ      | Musa cultivar       | 1.01    | 4.4  |
| 6  | サカナ類**   |                     | 0.53    | 2.3  |
| 7  | サツマイモ    | Ipomoea batatas     | 0.47    | 2.1  |
| 8  | ヘビ類**    |                     | 0.35    | 1.5  |
| 9  | トリ類**    |                     | 0.30    | 1.3  |
| 10 | サトウキビ    | Saccharum spp.      | 0.26    | 1.1  |

\*括弧内の数値は、順位外の食品も含めた総摂取量 (成人換算値)

\*\*これらに分類される全ての種を合計したもの

以上のようなブタの消費に関する観察を基に、ブタと貨幣経済との関わりを考察する前に、ボサビにおけるブタ飼育の現在の定量的な特徴をまとめておきたい。まず1999年11月時点のシバラマ村民150人31世帯が飼育しているブタの頭数をまとめてみた。村外で飼われている、つまり売買等社会的に消費される対象となるブタは、オス26頭、メス39頭、計65頭であった。また村内で飼われている、つまり社会的に消費される対象とならない子ブタは、12頭であった。以上飼育されている全頭数は77頭であり、ヒト・ブタ比(Pigs per person)は0.51頭/人と計算される。この値は、例えば口蔵のレビューにおいて比較すれば[Kuchikura 1994]、ニューギニアに居住する集団の中で中程度であり、ボサビのブタ飼育は高地地域ほど盛んではないものの、ある程度の熱心さで行なわれていることを示唆する。

次に、ボサビの食物摂取の中でブタがどの程度の重要性を持っているかを見るために、シバラマ村の8世帯(33人)において、1世帯当たり1カ月間の食事調査を行なった結果を表2にまとめてみた。<sup>(3)</sup>この表のタンパク質摂取の欄で見えてくることは、ボサビの人々の動物性タンパク質は、フクロネズミやザリガニなどの狩猟採集の生産物に多く依存しており、ブタもある程度貢献はあるものの生業生態の中心にはなっていないということである。また新しく導入された生業であるサツマイモ栽培は、エネルギーで四位、タンパク質で六位と、伝統的生業と置き換わったとは言い難い。

以上の定量的な特徴を見てみると、ボサビの動物性タンパク質に関する環境利用システムは、狩猟採集を中心とするより低地のシステムに近いと言え、ブタ飼育の生態学的な重要性は現在でもそれほど高くはない。この結果から、高地地域のようにサツマイモ栽培によって、森林を草原化し動物性タンパク質をブタに依存するシステムとは異なり、移動農耕によってダイナミックに森林を維持し、狩猟採集を可能にする環境利用システムが、この動物性タンパク質の摂取パターンを支えているといえる。

## ⑧……………貨幣経済とブタ売買に関する考察

では、故意に畑の中にブタを放ち、そうしてからブタを屠殺し、肉を売却することで現金を得る、このようなボサビの人々の一見奇妙な行為を、貨幣経済との関わりから考察していきたい。

まずなぜ人々はブタが「野生化」したことをアピールした上で売買を行なうのだろうか。先ほど分析したように、それはブタが自分に属さないことを示す操作であると考えられる。このような、飼いブタがその所有者によって消費されることを忌避する規範は、売買の事例に限らず日常的に観察される。少なくとも食事調査において筆者がインタビューした限りにおいては、成長後の自分のブタを屠殺して食べた者はいなかった。数例、自分のブタを食べたのではないかと疑われる例もあったが、そのような場合、対象者は、「これは野ブタだ。」と強弁するのが常であった。彼らの間で、カボ(飼いブタ)とイコ(野ブタ)は厳密に区別されており、イコなら狩猟の産物として消費してよいのである。「奴は、隠れてカボを食う奴だ。」<sup>(4)</sup>というのは、食物交換に関する呪術的信仰が強力な彼らの社会において、かなり辛辣な悪口であり、もし自分のブタ(子ブタ以外)を殺して食べた例があったとしても、わずかなものだとして推定される。

このような「自分のブタを食べてはいけない」という規範は、ボサビだけではなく大パパア台地

の集団に共有されていると考えられる。より低地のクボにおいて、やはり食物交換に関する呪術的信仰に深く関係しながら、同じような規範が存在するという報告がある〔須田 1995〕。またボサビの北隣のエトロでは、「畑を荒らしたこと」に対する解釈は異なるが<sup>(5)</sup>、「畑荒らし」に関する報告がある〔Dwyer 1990〕。「畑を荒らした」ことで初めてブタが消費されることは、「自分のブタを食べてはいけない」という規範に基づいたものであると再解釈できるかもしれない。また自分のブタを極力消費しないという行為は、高地地域のフリでも報告されている〔梅崎 2000〕。

さて、「畑を荒らした」ブタが彼らにとって売買に適したブタであるということはわかったが、ではなぜ売買されるのはブタなのであろうか。それはやはりブタが婚資などの交換財として使用されてきたこと、そしてその婚資としての使用が近年始まったことによると考えられる。交換財として用いられてきたものが貨幣経済と結びつくということは容易に理解できる。なぜなら現金も交換財であるからである。しかし伝統的に婚資として使用されてきた子安貝や真珠母貝は、現金で売買されないばかりか、交換財としての使用も行なわれなくなっている。その理由として、子安貝や真珠母貝が彼らの間で生産できないということに加えて、それ自体に使用価値がないということが考えられる。一方でブタは交換価値があると同時に、動物性タンパク質を供給できるという使用価値を持つ。

ブタの交換財としての使用は、近年盛んになったと考えられるが（伝統的にも紛争の解決などに使用されたと思われるが）、それは貨幣経済の浸透、外部からの影響の増大（サツマイモ栽培とキリスト教布教）と同時に起こっている。つまり貨幣経済の浸透が先か、ブタの商品化が先かというのは結論付けられないのであるが、少なくともそれらがポジティブ・フィードバックの関係を持ってそれぞれの受容を加速していったと考えられる。つまり外部の生活スタイルの需要が始まり、それによってブタの生産が増加し、同時に貨幣経済の受容を促進し、それらが欲望の増大や定住化の受容を導くことによってさらなる生活スタイルの変容をもたらすという過程である。その過程の中で、本来ほとんど余剰生産物のなかった（蓄積できる財のなかった）ボサビに、余剰生産物としてのブタが恒常的に存在するようになって、売買が継続的に行なわれるようになったのである。

しかしそのように考えていくと、彼らの間で現金と交換されているものがもう一つある。婚資が現在、現金でも支払われているということは、女性も現金と交換されているのである。ただしこのことは女性が貨幣経済と結びつけられていることを意味しているのではない。彼らの社会で、女性が外部の者と結婚する例はほとんどない。つまり女性と交換される現金は、理念としては社会の中を循環するだけであり、その意味で伝統的に使用されてきた子安貝や真珠母貝と同じ存在である。婚資として使用される現金は、貨幣経済の価値に関連付けられていないのである<sup>(6)</sup>。

このことこそ、ブタが「畑を荒らした」上ではじめて売買される真の理由が含まれている。先ほどブタが「畑を荒らした」ことは、自分（及び自分の属する共同体）の所有ではないことを示す操作だと考察したが、自分の所有でないことを示す必要性は、呪術的信仰によるだけではない。自分のブタを売買し、例えば缶詰などの食品、例えば金具などの商品を購入するために使用するのには、社会の内側で循環するものではないことを示す必要があるのである。婚資として使用されるブタは、その使用が近年始まったとはいえ、理念的には社会内部で循環するものである。そのようなブタは自分のものであると同時に、社会全体のものであるといえる。しかし「野生」のブタは循環

の輪の外に存在するものであり、社会内部のどのような価値に関連付けても、その使用が規制されない。貨幣経済は彼らの社会の外側で循環する体系であるが故に、もし彼らが貨幣経済の循環に参加を表明するならば、「野生」のブタが優先的にその接点として用いられるのである。

以上、「畑を荒らした」ブタが、貨幣経済に結びつけられる過程を分析してきたが、生業生態の変容、あるいは貨幣経済の受容は歴史軸の上で起こっている事象であり、変化に関する分析において本論文では議論を尽くしたとはいえない。例えばブタの飼育が過去と比較して現在増加しているという推測は定量的データに基づいたものではないし、今後ブタの飼育や生業生態がどのように変化していくのかを予測できるデータもない。蓋し貨幣経済と生業の関係性を明らかにしていくためにも今後、時間軸にそってデータを蓄積していくことが必要である。そしてそのような生態人類学の大きなテーマと同時に、ボサビの人々と環境の行く末を勘案するためにも変容を理解していかなければならない。「畑荒らし」によるブタ売買が一層盛んになり、彼らの生業生態が質的な変化、具体的には高地地域のような飼育形態に変化していくことになれば、この地域に大きな環境変化つまりは森林破壊をもたらすこともありうる。その意味で、彼らのブタ飼育は今後も注意がはらわれるべきテーマである。

#### 註

(1)——厳密には移動農耕 (Shifting cultivation) の下位分類である Slash and Mulch と分類されるべきである [Conklin 1961]。Slash and Mulch とは、移動農耕 (Shifting Cultivation) を詳しく分析した Conklin による命名で、焼畑 (Slash and Burn) を伴わない移動農耕の総称である。

(2)——例えばエサを示し、名前を呼んでも所有者に近づかなくなったような場合。

(3)——その方法としては、核家族 8 世帯の 33 人に対して、各 1 週間、世帯内の各個人が摂取した生産物の量を、調理された後摂取される直前に秤量した。その結果を可食部重量に換算し栄養成分表を用いて、各生産物から摂取されたエネルギー、タンパク質、脂肪の量を算出した。エネルギー、タンパク質、脂肪への換算は、South Pacific Commission 刊行の食物成分表 [Dignan 1994] を用いた。なお調査時期は、1999 年 8 月から 9 月である。分析においては、調査対象であった成人男性の平均年齢と平均体重を用い、一人一人の摂取量を成人一人当たりの摂取量として標準化した。その際、FAO/WHO による換算式 [FAO/WHO/UNU 1985] を用いた。

(4)——ある食物を持たない者に分配しないことは、あらゆる害をもたらす生霊 (セイ) を発生させることである。分配されなかった者は、本人が意識しないうちに生霊を出し、生霊が分配しなかった者に取り憑く。取り憑かれた形態によって、分配しなかった者は病気になるたり事故にあたりたりして災難にあうと信じられている。

(5)——Dwyer は、エトロロにおいて、季節変化によってサツマイモ畑の生産量が落ちたことを儀礼的に表現するために、ブタの「畑荒らし」が演出されると考察している。この演出によって人々は、サツマイモ栽培を中心とした環境利用システムからサゴデンプン精製を中心とした環境利用システムに転換することを儀礼的に理解するのだと解釈される。

(6)——女性が貨幣経済と結びつく事例、つまり売春は、現在商業的木材伐採が行なわれている地域では日常的に見聞きされる。そこではニューギニアあるいは世界各地から集まった労働者が恒常的に居住しており、女性は社会内部だけで交換される対象ではない。

#### 参考文献

McAlpine, J., G. Keig and K. Short 1975. *Climatic Tables for Papua New Guinea*. Commonwealth Scientific and Industrial Research Organization.



- 
- Clifford, J and G.E. Marcus (eds.) 1986. *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. University of California Press.
- Conklin, H.C. 1961. *The study of shifting cultivation*. *Current Anthropology*, 2 (1): 27-61.
- Dignan, C. (ed) 1994. *The Pacific Islands food composition Tables*. South Pacific Commission.
- Dwyer, P. 1990. *The pigs that ate the garden*. The University of Michigan Press.
- FAO/WHO/UNU 1985. *Energy and Protein requirements*. WHO.
- Kuchikura, Y. 1994. A comparative study of subsistence patterns in Papua New Guinea. *Bulletin of the Faculty of General Education, Gifu Univ.* 30: 41-89.
- Modjeska, N. 1982. Production and inequality: perspectives from central New Guinea. *Inequality in New Guinea Highlands Societies*. A. Strathern (ed.) pp. 50-108 Cambridge University Press.
- National Archives of Papua New Guinea 1934-1975. *Patrol report*. Territory of Papua New Guinea.
- Odani, S. 2002. Subsistence ecology of the slash and mulch cultivating method: empirical study in Great Papuan Plateau of Papua New Guinea. *People and Culture in Oceania* 18: 45-63.
- Ohtsuka, R. 1983. *Oriomo Papuans: Ecology of Sago-Eaters in Lowland Papua*. University of Tokyo Press.
- Schieffelin, E. 1977. *The sorrow of the lonely and the burning of the dancers*. University of Queensland Press.
- Suda, K 1997. Dietary Change among the Kubo of Western Province, Papua New Guinea, between 1988 and 1994. *Man and Culture in Oceania* 13: 83-98.
- 梅崎昌裕 2000 「バブアニューギニア高地におけるブタ飼養の現在の意味」 *動物考古学*第 15 号: 53-80
- 小谷真吾 2001 「バブアニューギニア高地辺縁部における伝統的農法の生業生態と社会構造」 *動物考古学*第 17 号: 25-49
- ゴドリエ, モーリス 2000 『贈与の謎』 山内昶訳 法政大学出版局
- 須田一弘 1995 「生態と社会変化-バブアニューギニアの事例をもとに」 大塚柳太郎他編 『生態人類学を学ぶ人のために』 pp. 217-237 世界思想社
- 2002 「平準化をもたらすクボの邪術と交換」 大塚柳太郎編 『ニューギニア-交錯する伝統と近代』 pp. 87-126 京都大学学術出版会

(千葉大学文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2004年6月30日受理, 2005年1月15日審査終了)

## **How Are Pigs Exchanged for Cash? : Subsistence Ecology and Cash Economy in Highlands Fringe Region of Papua New Guinea**

ODANI Shingo

Pigs that eat field crops are a source of cash. People deliberately release pigs onto fields and later slaughter them, and then sell them to obtain cash. This is the case observed in Bosavi who live in Southern Highlands Province, Papua New Guinea. This case demonstrates the process; how cash economy is incorporated into the local system. This paper, revealing subsistence ecology of Bosavi including raising pigs, will examine the distinctive features of their pig raising through a comparison with subsistence systems of other groups. At the same time, through analysis of the case, the purpose of this paper is to examine the infiltration of cash economy into subsistence system, on which few studies have been undertaken in spite of having much significance in Ecological Anthropology.

As a result, an analysis of criteria that distinguish subjective reasons for selling or not selling a pig has led to the formulation of criteria, whether or not a pig belongs to one's community. By letting pigs "eat field crops" or "turn to be wild", pigs are classified as existing outside one's community. In Bosavi society, having strong religious beliefs related to the exchange of food, normatively an owner is not to consume a pig that he has raised. When examining why they sell pigs through such complicated process, there is the fact that Bosavi have nothing else to sell. This means not only that they have no other surplus produce, but also that pigs have been used as exchange before the spread of cash economy. Meanwhile, the use of pigs as exchange has become very popular in recent years, and this has coincided with the spread of cash economy and an increase of outside influences. In conclusion, the infiltration of cash economy and selling pigs have accelerated each other's acceptance, as positive feedback relation.